小学校でも活発で積極的な有希は、クラスの中でもめだつ存在になっていた。先生の質問には一番に手を挙げた。質問がないときでも、「昨日、家で花火をやって……」と関係のないことをみんなの前で発言したがった。学級会副会長や書記などクラス委員も続けて務め、合唱コンクールでは先頭に立ってクラスをまとめた。

いちばんうれしかったのは、”歯医者さんの絵”コンクールで金賞をもらったときだった。みんなが待合室で泣いている子供の絵や奥で準備している歯医者さんの絵を描くなかで、有希は歯医者さんと大口を開けた自分の顔を、画用紙からはみだすほどのアップで描いた。

北海道で一番の賞をもらった有希は、大きな満足感を覚えていた。

(みんなと同じじゃつまらない)

そんな思いが結果となって表れたような気がした。

世界は自分のためにあり、未来は明るく開けているかのように思われた。

だが、世の中そう甘くはなかった。

6年生になった有希を、思わぬ試練が待っていたのである。

「有希、本当のこと言いなさい」

お腹が痛い、頭が痛いとさまざまな理由をつけて、もうひと月も学校を休んでいる娘の顔をのぞき込んで、亮子は言った。

「怒らないから」

めずらしく優しい母のしゃべり方に、有希はこらえきれず泣きだした。

その夜、亮子ははじめて、有希がいじめにあっているのを知った。「めんこい」というのは北海道弁で「かわいい」という意味だ。授業中手を上げれば一番に指され、また、何かと先生に物を頼まれることの多いかった有希は、いつのまにか同級生から「先生のめんこ」と呼ばれるようになったという。何かにつけてめだちすぎるのが同級生の反感をかったらしい。

「有希ちゃんは先生のめんこだから、クラス委員に選ばれた」

「磯谷は先生のめんこだから、成績もいいのをつけてもらえる」

誰かがそんなふうに言ったのをきっかけに、やがてクラスの全員が有希のことを避けはじめた。仲の良かった友達ふたりからも交換日記が回してもらえなくなり、「おはよう」と言っても無視されるようになった。理科の実験でも気がつくとひとり余っていた。遠足ではひとりで弁当を食べた。もちろん、帰るときもひとりだった。

いじめは徐々に陰湿になっていく。靴箱の名前が消されたり、黒板に「磯谷死ね」とバカでかく書かれたりするようになると、本当に死にたい気分になった。

「もう学校に行きたくない」

そう言って有希は泣いた。

弱音を吐いたり、悩みを告げたりすることなど一度もない娘だった。亮子は思わず怒鳴っていた。

「誰、そんなことしたのは?その子の家に行ってくる!」

そんなことをしたらよけいにややこしくなるのはわかっている。怒りがおさまらない亮子を有希は必死で止めた。

「ちったん、どうかしたの?」

パジャマ姿の民教が心配そうに顔をのぞかせていた。

有希にとってそれは、生まれてはじめて味わう挫折感だった。と同時に、生まれてはじめて自分の内面を見つめることを余儀なくされる機会でもあった。

1年生の頃、成績表の通知欄に「磯谷さんは自分さえよれば、他のことはかまわないようにみえるときがあります」と書かれたことがあった。絶対そんなことない、とそのときは思った。でも、そうかもしれないと今は思えた。

(私は自己中心的で、わがままで、世界でいちばん嫌いなヤツなのかもしれない……)

有希はひとり部屋に閉じこもって考えた。

とにかく学校へは行くようにと母に言われて、数日後、有希は家を出た。学校に着くと、以前仲が良かったふたりがあやまってきた。母が担当の教師に頼んだに違いなかった。でも、有希は決めていた。同情で仲良くされるなら、ひとりのほうがずっといい。しばらくぶりに行った学校で、有希は以前より少し強くなっていた。

右、左、右、左……。

どんなことがあっても足を交互に出せば体は前に進む。

ひとりで歩く帰り道、ふと、右足の前にあるものに目が止まった。あわててブレーキをかけると、その小さな花に顔を近づけた。

「かわいい……」

それは、コンクリートの隙間から、ひょっこり顔を出したたんぽぽだった。誰にも気づかれずにひっそりと、けれどもたくましく花を咲かせた、ひよこ色のたんぽぽだった。

しばらくもつめているうちに、なぜか元気が出てきた。

ふと思った。

(私はこれから、こんなふうに生きよう。誰にも気づかれず、めだたず、ひとりで好きなことをやるんだ)

有希はすっくと立ち上がると、家へと続く長い道をいつもより早足で歩きはじめた。